

新荒町

附祭若者連

新荒町・荒町・上徒士町
常番町・町組町・稻荷町

100周年記念誌

若組

祭





新荒町附祭若者連 100周年記念誌

祭

目次

- 2 発刊のご挨拶
新荒町附祭若者連 委員長 工藤 昌男
- 3 ご祝辞
神明宮 宮司 中居 靖夫
- 4 ご祝辞
はちのへ山車振興会名誉会長
新荒町附祭若者連 最高顧問
参議院議員 滝沢 求
- 5 山車組資料館 part 1
- 6 平成26年100周年記念山車
平成26年 お祭りスナップ
7 製作編
9 祭り期間編
11 新聞での紹介
- 11 山車組資料館 part 2

写真で振り返る新荒町附祭若者連

- 13 昭和6 (1931) 年～
- 31 昔話聞き書き
- 33 昭和52 (1977) 年～
- 35 見返し七選
- 37 昭和57 (1982) 年～
- 55 新荒町附祭若者連 100年のあゆみ
- 57 参加百周年記念祝賀会 出席者一覧



1：昭和31 (1956) 年「鳴神」。カラー写真として残っている当山車組の写真としては最古のもの。当時の街並みや祭衣装の色彩を知るうえでも貴重な写真。(写真：高砂イシ) / 2：昭和44 (1969) 年、お通りで八戸市交通部新荒町営業所待合所前を通過する「俵藤太の百足退治」の山車。(写真：下斗米功行)

発刊のご挨拶



新荒町附祭若者連 委員長
工藤 昌男

晩秋の候の良き日に、多くの関係各位のご来賓の方々をお迎え致し、参加百周年の節目の会の開催、および本誌の発刊をする運びとなりました。これもひとえに、地域の皆様、各企業の方々、関係各位の物心両面にわたるあたたかいご指導とご支援、ご協力の賜と、心よりお礼申し上げます。

大正4年に初参加以来、百年の歴史を振り返りますと、幾多の困難と危機がありましたが、山車製作に携わった諸先輩、町内の方々のたゆまぬ努力と団結によって、それを乗り切って、現在まで頑張ってまいりました。この輝かしい誇り高い伝統をしっかり受け継ぎ、次代を担う子供達に大きな夢を与えることが我々の努めです。

これからの更なる発展を目指してまい進してまいる所存です。今後とも、より一層のご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げますと共に、皆様方のご多幸を心より祈念致しまして、発刊のご挨拶と致します。



3：昭和40 (1965) 年「恵比寿鯛」。三井博明さんの木遣り音頭が祭りの空に響き渡る。 / 4：昭和26 (1951) 年の門付風景。木遣り音頭は大久保権太郎さん。「紅葉狩」の山車には、「自作人形」の札がある。5 昭和30 (1955) 年「手鞠獅子」の山車。この獅子と手鞠は、竹で形を作った。6：昭和49 (1974) 年「浦島太郎竜宮に遊ぶ」。(写真3, 6：高砂イシ、4, 5：大久保孝造)





1



2



3

1：昭和38(1963)年の尻多商店前。2：昭和40(1965)年、現在の新荒町消防屯所前のバス停付近にあった八戸市交通部新荒町車庫。山車は柏崎新町附祭「コブとりじいさん」。3：昭和40(1965)年、現在の明治安田生命新荒町営業所前。山車は十一日町龍組「平和(極楽浄土)」。4：昭和40(1965)年、八戸市交通部営業所と待合所(左)、八戸タクシー新荒町営業所(右)。(4点の写真全て：下斗米功行)



4

ご祝辞

神明宮 宮司
中居 靖夫



新荒町山車組が三社大祭神明宮の附祭として、大正4年にお供を始めてから百周年を迎えられたことを、心よりお祝い申し上げます。

顧みると、祭典日の変更、順路の変更など、神社にとっても数多くの苦境がありました。山車組関係者のご協力により乗り切ってきました。

新荒町山車組でも、山車の製作現場では大変な苦労があったと思います。私の記憶だけでも、上徒士町(2箇所)、稲荷町、是川、青葉、江陽へと転々としています。

これ等も「なんとでも神明さんにお供する」という山車組皆様の心意気があったから克服出来たと思います。深甚の感謝を申し上げます。

5年前に「本来三社大祭はどうあるべきか」あるいは「20年、30年後を見越した三社大祭の在り方」を探るべく『三社大祭グランドデザイン』が策定されました。今後のめざす姿のキャッチフレーズとして「八戸三社大祭は八戸の宝。楽しもう 祭を！ 伝えよう 子供たちの世代へ！」とあります。

次代を担う子供たちの夢と希望のためにも努力する所存です。関係各位のご協力を賜りますと共に、新荒町附祭若者連の益々のご隆盛と、ご壮健を祈念申し上げ、お祝いの言葉と致します。



昭和30年代の常番町。(写真：大久保孝造)

ご祝辞

はちのへ山車振興会名誉会長
新荒町附祭若者連 最高顧問
参議院議員



滝沢 求

この度、新荒町山車組が八戸三社大祭参加百周年を迎えられましたことに心からお祝い申し上げます。

大正4年に新荒町附祭若者連として初参加して以来の百年を振り返りますと、第2次世界大戦、バブル崩壊、東日本大震災など、幾多の困難と試練を乗り越えてこられたことと想像に難くありません。まさに地域の皆様、関係各位の並々ならぬご尽力とご努力の賜物と感慨を深めております。

三社大祭の輝かしい伝統と精神を受け継ぎ次世代を担う子供達にどのように伝えていこうか、これからの大きな課題のひとつとなりますが、皆様のゆるぎない団結のもと、更なる飛躍を目ざしていられることを心より願っております。

今年、国重要無形民俗文化財指定10周年、そして八戸藩開藩350年という記念の年でもあります。また、文化庁によりユネスコの無形文化遺産に「八戸三社大祭の山車行事」を含む国指定重要無形民俗文化財の山車行事などで構成する「山・鉦 屋台行事」を提案することになっており、早ければ2015年中にユネスコの政府間委員会で登録の可否が審議される見通しになっております。ユネスコの文化遺産が誕生するのか、私も平成15年より10年余り、はちのへ山車振興会々長として関わってきたこともあり、大いに期待を募らせているところです。

今後とも新荒町附祭若者連並びに関係6町内の皆様方の益々のご発展とご健勝を祈念申し上げ、お祝いの言葉とさせていただきます。

5：現在のグランフォート前にあった理容ササキ。山車は昭和45(1970)年、吹上山車組「義経八艘飛び」。(写真：下斗米功行) / 6：昭和45(1970)年、新荒町の田村家具店、橋本油店前。当時はまだ古い町並みが残っていた。山車は新荒町附祭若者連「天馬」。(写真：大久保孝造)



消防屯所は、火防のほか、三社大祭、机組等の集会の場所としても使われている。八戸を代表するシンボルのひとつとしても親しまれた旧荒町消防屯所は、大正9(1920)年に悪虫村(現在の八戸市長苗代悪虫)出身の棟梁後村三郎によって設計された。玉葱型のドームが印象的な洋風建築は、異国情緒にあふれ、戦争でウラジオストックに滞在した際に目にした街並み、特にギリシャ正教の教会に心奪われ、その絵葉書を元に図面を引いたという。写真は、昭和47(1972)年頃だと思われる。(写真：八戸市消防団第一分団一班)



現在の新荒町消防屯所。三社大祭の期間は、山車組での集会場所として親しまれている。



5



6

新荒町附祭若者連 山車組資料館 part 1

新荒町附祭若者連に残る資料類をご紹介します。
※P11・12にもあります。

木遣り音頭

ヤアーレ ヨイヤー、 イエー
ヤアレヨイヤアー
一部の一部は若組一同
引き出す若衆はこの血はいさみ

ヤアーレ ヨイヤー、 イエー
ヤアレ ヨイヤアー
今年良世デー 三社の祭
繰出す山車(若い衆)は若組一同

木遣り音頭

新荒町附祭若者連の木遣り音頭。若組ならではの音頭2種類を紹介しします。



新荒町附祭若者連では、上図のような、扇子のかたちに「若」の文字があしらったものを多く見かけられる。これは、新荒町屯所の纏(上写真)の地紙纏に由来したもの。その形は扇子型で、扇纏とも言われる。その扇子型の部分に「若組」の「若」を記している。なお、地紙は扇紙のことで、風を起こして火を消すことと、末広りの縁起をとっている。



写真：株式会社クラフポート

祭

大太鼓の胴に大きく刻まれている「祭」の文字。



旧荒町消防屯所 (P13) の入り口に掛けられていた額縁で、「第一一防組」と記されている。昭和4 (1929) 年に「若組」が改称され、この名称になった。戦後以降の名称は「第一分団一班」。額縁は新荒町消防屯所の2階に飾られている。



手古舞が持つ「じゃんがら」。

新荒町附祭若者連の大太鼓は、戦後復活した翌年の昭和26 (1951) 年8月に作られた。大変古いものながら、今なお現役で使われている。大太鼓の胴(側面)には、発起人と寄贈者の名前が刻まれている。バチは、吹上の大澤桐材工場で作ってもらっている。新荒町の篠笛は六号。



鈴鹿御前

100周年記念山車

平成26年
— 2014

鬼の棲家として伝えられる伊勢の国・鈴鹿山。そこで暴れ回る大嶽丸(おおたけまる)、悪事の高丸ら鬼たち。山麓に住む天女・鈴鹿御前は藤原俊宗(としむね)と契りを交わし、鈴鹿御前の神通力(じんつうりき)と俊宗の武勇、さらに毘沙門天と千手観音の加護を享け、共に力を合わせて鬼たちと戦います。八戸三社大祭に参加して今年で100周年になるのを記念して、今までにない豪華で迫力のある山車を作りたいと思い、この題材にしました。鬼や虎、鎧武者たちの迫力と、鈴鹿御前・千手観音などの豪華さに力を入れています。



製作編

平成26年お祭りスナップ

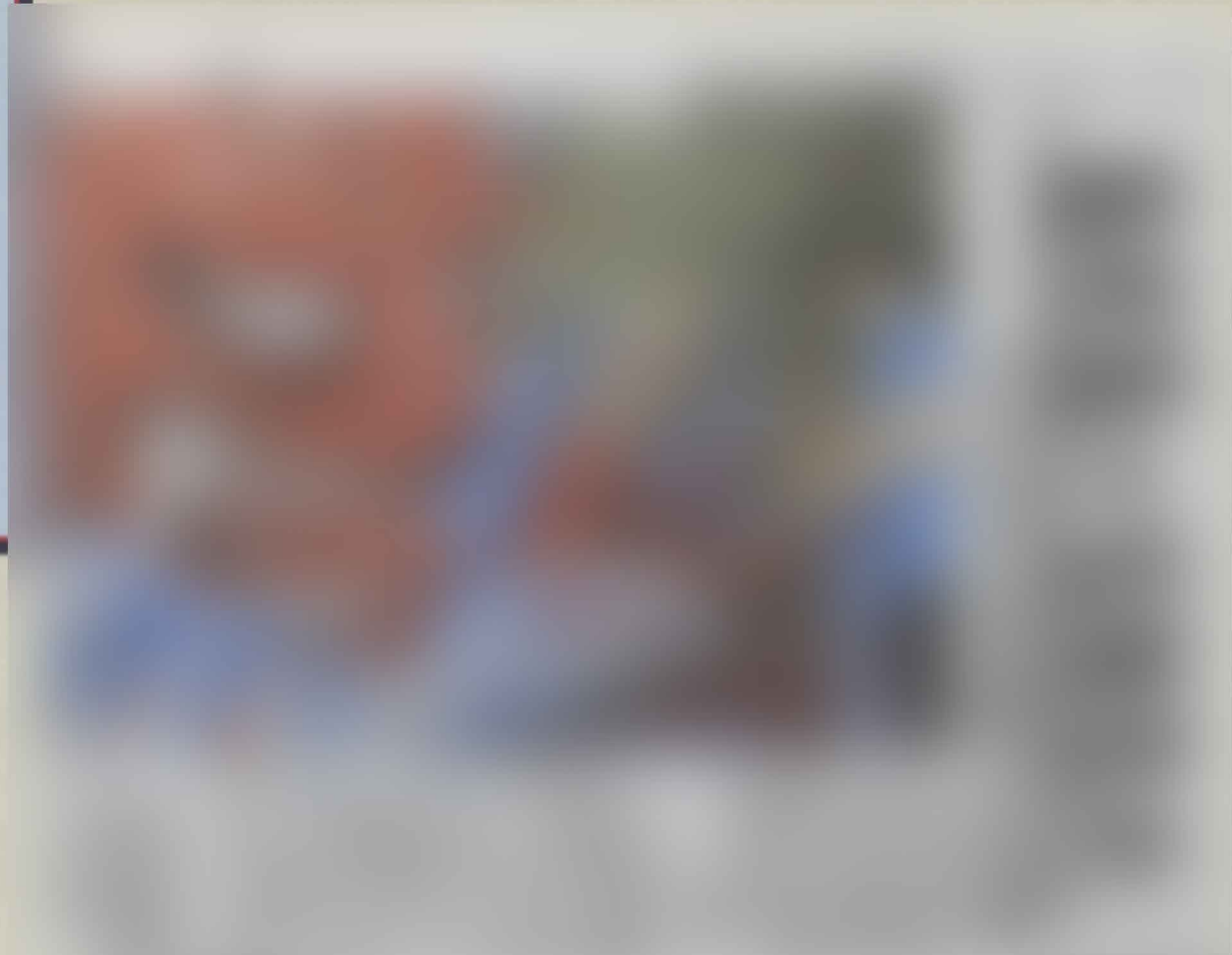
例年より早い4月下旬から作業を開始、多くの人が、早い時期から製作に励みました。



お祭り期間編

平成26年お祭りスナップ





東奥日報
7月28日(月)朝刊
東奥日報社提供



現在の浴衣(右)と、昭和35(1960)年から使用された浴衣(左)。「祭」の文字の位置と色、源氏車紋の中の水色の有無等が主な違い。戦後初期に、大橋十久満治さんが図柄等を決めたと思われる。当時は廿六日町の佐藤染物店で作っていた。

左は平成5(1993)年頃まで使用していた神纏。これが出来るまでは、子供たちの衣装はバラバラだった。右は現在の神纏。浴衣の図柄に似せたものになっている。下の子供用帯を締める。



新荒町附祭若者連
山車組資料館 part 2



デーリー東北
8月2日(土)
デーリー東北
新聞社提供



左：参加100周年の節目に作られた大人用の半纏。平成26(2014)年製作。／
下：昭和63(1988)年頃まで使用していた腰幕。



写真で振り返る

町連 荒祭者 新附若

町荒新

山車参加
十周年記念

山車参加
十周年記念

戦後参加 10 周年を記念して昭和 34 (1959) 年に制作された旗。

庚橋



昭和10年
— 1935

写真 梶村久子

山車参加10回 宮本武蔵と塚原卜傳との鍋蓋試合

昭和6年
— 1931



大原女の奴

昭和25年
— 1950



写真：馬場司

紅葉狩



昭和26年
— 1951

写真：大橋邦一

巴御前



秀作

昭和28年
— 1953

写真：高砂イシ

矢の根の五郎



秀作

昭和27年
— 1952

写真：大橋邦一

三人石橋

参加40年
山車参加20回



3位

昭和29年
— 1954

写真：大橋邦一



1・2:昭和 25(1950) 年「大原女の奴」。
 2は見返し「大原女」。当時は高欄山車が主流だった。／ 3:昭和 26(1951) 年「紅葉狩」。／ 4:昭和 27(1952) 年「矢の根の五郎」。／ 5・7:昭和 28(1953) 年「巴御前」。／ 6:昭和 30(1955) 年「手鞠獅子」。／ 8・9:昭和 32(1957) 年「賤ヶ嶽七本槍」。9の写真で木遣り音頭をとるのは馬場正一郎さん。／ 10 12:昭和 29(1954) 年「三人石橋」。12は、三位獲得に大いに沸く山車小屋。／ 11:昭和 20年代中頃の様子。(写真1, 4, 7, 10:高砂イシ、2, 3, 5:大橋邦一、6, 9, 12:馬場司、11:鈴木育子、写真8:デーリー東北新聞社提供 八戸市博物館所蔵)



手鞠獅子

昭和 30 年
— 1955



写真: 高砂イシ

鳴神

秀作

昭和 31 年
— 1956



写真: 高砂イシ

賤ヶ嶽七本槍



昭和32年
— 1957

写真：高砂イシ

川中島合戦之場



秀作

昭和34年
— 1959

写真：高砂イシ

村上四郎義光

錦旗奪還の場

昭和33年
— 1958



「村上四郎義光 錦旗奪還の場」の山車写真を
お持ちの方は、ご連絡ください。

黒田武士



努力賞

昭和35年
— 1960

写真：高砂イシ

伊達候と高尾太夫



昭和36年
— 1961

写真：大久保孝造

お江戸日本橋



努力賞

昭和38年
— 1963

孫悟空



努力賞

昭和37年
— 1962

写真：デーリー東北新聞社提供 八戸市博物館所蔵

義平 重盛紫宸殿奮戦の場

参加50年
山車参加30回



昭和39年
— 1964

恵比寿鯛

昭和40年
— 1965



娘道成寺

昭和42年
— 1967



写真：高砂イシ

那須の与一

昭和41年
— 1966



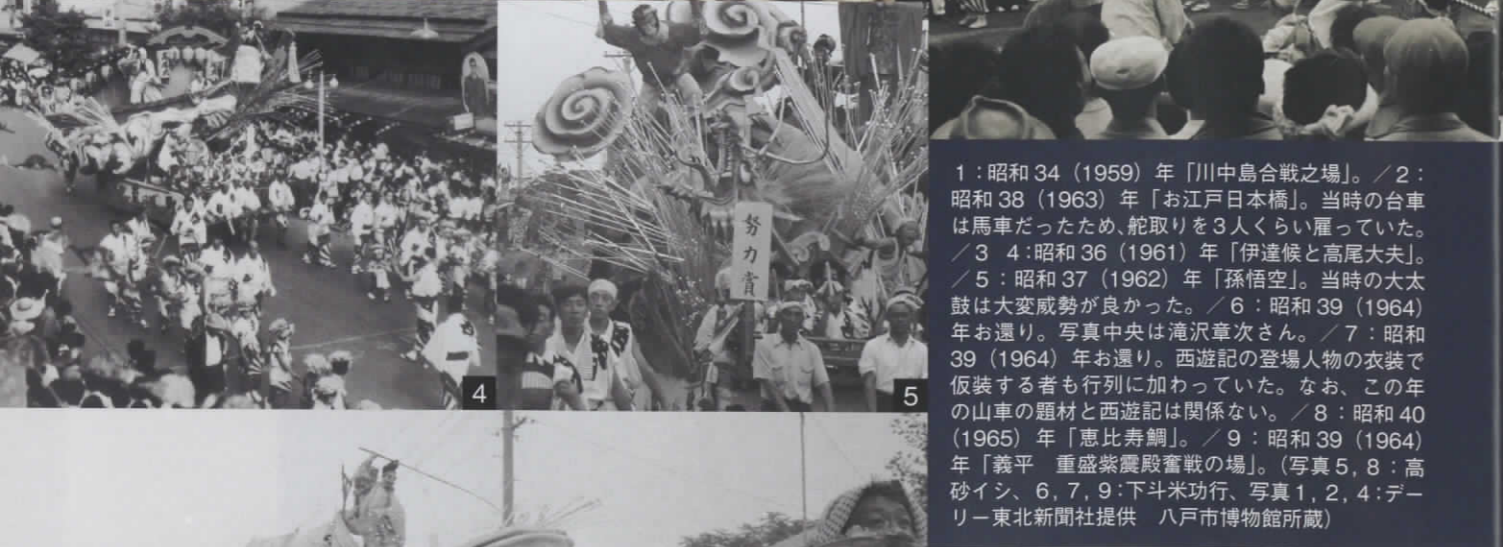
写真：高砂イシ

壺坂靈驗記

昭和43年
— 1968



写真：下斗米功行



1：昭和34（1959）年「川中島合戦之場」。／2：昭和38（1963）年「お江戸日本橋」。当時の台車は馬車だったため、舵取りを3人くらい雇っていた。／3 4：昭和36（1961）年「伊達候と高尾大夫」。／5：昭和37（1962）年「孫悟空」。当時の大太鼓は大変威勢が良かった。／6：昭和39（1964）年お選り。写真中央は滝沢章次さん。／7：昭和39（1964）年お選り。西遊記の登場人物の衣装で仮装する者も行列に加わっていた。なお、この年の山車の題材と西遊記は関係ない。／8：昭和40（1965）年「恵比寿鯛」。／9：昭和39（1964）年「義平 重盛紫雲殿奮戦の場」。(写真5, 8：高砂イシ、6, 7, 9：下斗米功行、写真1, 2, 4：デーリー東北新聞社提供 八戸市博物館所蔵)

俵藤太の百足退治



努力賞
昭和44年
— 1969

天馬



昭和45年
— 1970

日蓮上人佐渡配流

秀作

昭和46年
— 1971



千早城の戦い

努力賞

昭和48年
— 1973



一葉観音と道元禅師

努力賞

昭和47年
— 1972



浦島太郎
竜宮に遊ぶ

参加60年
山車参加40回

昭和49年
— 1974



安宅の関



努力賞

昭和50年
— 1975



1:昭和37(1962)年から昭和44(1969)年まで委員長を務めた根城進さん(中央)。/2:昭和43(1968)年、手古舞。/3 5:昭和47(1972)年「一葉観音と道元禅師」。/4:昭和42(1967)年「娘道成寺」。/6:お祭りが大好きだった長谷川内科胃腸科医院の長谷川正夫先生。昭和46(1971)年の写真。/7:昭和48(1973)年「千早城の戦い」。山車全体を覆うような、斬新な造形の岩山車だった。後ろには旧荒町消防屯所が見える。/8:木遣り音頭の名手、大久保幸一郎さん。/9:昭和50(1975)年「安宅の関」。お通りにて。/10:建物の屋根を金色にするアイデアは、この時委員長だった工藤勝朗さんの発案。(写真1 2,6,7 8:大久保孝造、3:下斗米功行、4,5,10:高砂イシ)

本能寺の変



奨励賞

昭和51年
— 1976



新荒町附祭若者連 昔話聞き書き



戦後、山車組が復活して間もない時期から新荒町にかり、製作と会計を担当。現在でもお祭りにかかる相談役の藤井貞治さんに、新荒町附祭若者連についてお話を伺いました。新荒町を支えてきたの人々とともに、新荒町と言えば武者ものと言われるようになった所以等、現在の山車組メンバーも知らない歴史まで明らかになりました。



昔話座談会に集まった山車組メンバー。左から順に、新井山雅彦、工藤昌男（現委員長）、泉山修一、藤井大輔、藤井貞治、下斗米功行。



5



6



7

5:昭和48(1973)年「千早城の戦い」の製作風景。大久保幸一郎さん(左)と工藤勝朗さん(右)。勝朗さんは、昭和45(1970)年から昭和58(1983)年まで委員長を務めた。/6:昭和60(1985)年「新牛若丸」の時の藤井貞治さん。/7:昔の写真を見て懐かしみながら話し進む。(写真5:大久保幸造、6:藤井貞治)

戦後復活直後の山車組と山車作り

新荒町のお祭りは、戦前は消防団が中心で、戦後は町内会が基盤になることで山車組が復活しました。戦後初期は、大勝商店（現株式会社ダイカツ）の初代社長大橋十久満治（とくまんじ・写真2）さん、大工の森越文太郎さん、西村政太郎さんの三人が中心で、まず大橋さんが題材を考え、土台は森越さん、小物は西村さんが主に手掛けていました。大橋さんの趣向で、当時は歌舞伎調の山車が多く作られました。

特に印象深いのが、昭和30(1955)年の「手鞠獅子」(写真1 P18)。やはり大橋さんの発案で、獅子と手鞠は全て竹で組んだもの。すごく評判が良く入賞したごったと言われましたが、その年は審査が無くて残念でした。

現在使っている大太鼓は古くて、昭和26(1951)年に作ったもの(P5)。昭和59(1984)年から平成3(1991)年まで委員長を務めた中山安弘さんの父、中山秀次郎さんや西村さん、大橋さん、上村昭二さんは、大太鼓を作るのに発起人になってお金を集めてくれました。大太鼓の皮の張り替えは、昭和40(1965)年前後は剣吉の業者にお願いしていましたが、後に盛岡の材木町にある太鼓屋さんで張り替えました。現在は、東京台東区にある宮内庁ご用達の宮本卯之助商店で、平成12(2000)年頃に張り替えたものを使っています。

私が新荒町のお祭りに参加したのは昭和36(1961)年から。当時はお祭りが8月20日からだったので、7月頃から製作を始めて、完成まで1ヶ月半くらいかかりました。参加して何年かで衣装関係はほとんど任せられるようになり、自分で生地を買ってきて縫いました。大勝さんは、昔は革具や馬具の製造販売をしていて飾り物等がたくさ

んあったので、馬の鞍や鎧は大勝さんから教わって、自分でミンをかけて作りました。

昭和34(1959)年頃に、長谷川正夫さんが今の場所で長谷川内科胃腸科医院进行を開院しました。あの先生もお祭りが好きで、本当にお世話になったものです。毎晩看護婦さんを5人くらい山車小屋に連れてきては製作を手伝わせてくれました。人形に使う薬を提供してくれる患者さんを紹介してくれたこともありました。夜来る時はビールを1ケース担いできて、山車を作って帰る前に白せんべいを皿にして、その上に秋刀魚や鯖の缶詰めを載せて一杯飲んで帰ったものです。だから、長谷川先生のおかげですごく和やかでした。

山車行列の中で仮装行列を初めて行ったのは新荒町で、西村勝男さんたち数人が始めました。お選りの時だけ、肴町(六日町)のあたりで綱の間で踊ったり、ひょっとこのお面を被ったりするとお客さんが喜んでくれました。昭和35(1960)年頃から10年くらいは続いたと思います。

トラブルの後の結束強化

長い歴史のなかで、昭和40(1965)年の「恵比寿鯛」(P23)だけは外注でした。大工さん同志や消防との関係、金銭面等でのめ事があったのが原因です。この年の山車は全部百石(現おいらせ町)で作ってもらいました。依頼先は、百石にかつてあった立花商店の旦那を中心に4~5人で組織していた山車製作組合のようなところ。当時、彼らは八戸の山車組からよく頼まれて、山車に乗せる馬や虎を作っていました。そもその彼らのご縁は、西村政太郎さんの妹さんが嫁いだ家が立花商店だったのがきっかけでした。あの年は、百石で山車を作っているものだから、町内に山車小屋はあっても山車が無い。

子供にはどこで作ってるか聞かれるし、お祭りの前々日の夜中に引っ張って運んできたりと大変でした。そういうことから、お祭りはやっぱり自分たちで作らなければならないとわかり、翌年からは結束が良くなりました。

その翌昭和41(1966)年には棟梁の橋館貞助さん(写真3右下)が加わり、源平の武者ものを多く手掛けるようになりました。彼は結構うるさかったですが、何度か入賞して結果を出す、やることはやる人でした。昭和45(1970)年「天馬」(P26)の馬を主役にする発案は、弟の橋館幸吉さん。こういうのは新荒町しかやることが無くて、彼の発想が良かった。この時使った馬は、一番最初は昭和28(1953)年「巴御前」(写真4 P16)で主役に乗せました。この馬も百石で作ってもらったもので、作りが良くサラブレッドと言われていました。残念なことに、毎年紙を貼り重ねるものだから、使うごとに太っていききました。昭和44(1969)年の「依藤太の百足退治」(P26)の百足も百石で製作してもらったもので、良い出来でした。昭和40年代は様々なトラブルがありましたが、この山車で6年ぶりに努力賞を頂けたのは本当に励みになりましたね。

村井四良さんの指導、そして武者ものを中心とした黄金期へ

橋館さんが加わって数年して、村井四良さんに指導をお願いしたらどうかと話が出て頼むことになりました。四良さんは鳥屋部町の村井治兵衛さんの弟です。治兵衛さんは、戦後すぐから六日町の山車をずっと作っていました。四良さんは軽米にいましたが、下大工町専属で山車を作っていました。ですから、下大工町にご挨拶に行ってお

付き合いが始まり、昭和46(1971)年の「日蓮上人佐渡配流」(P27)の時に初めて四良さんに指導を仰いで山車が出来ました。製作が始まると、製作期間中に泊まっていた下大工町まで迎えに行きましたが、最初の頃は軽米まで迎えに行っていたので大変でした。

四良さんの山車は、人形や馬の向きが前後左右様々な方向を向いており、人形の手動き、目の向き、首の角度、姿勢など一体一体吟味して配置していました。ですから、人形を作る時は実際に人にポーズを取ってもらい、かなりこだわって作りましたよ。鎧もまた然りで、櫛引八幡宮の鎧を参考にして糸を斜めに通す本格の編み方で編んだので、製作は本当にゆるくなかったです。でも丈夫な作りなので何年間も使うことができましたね。

四良さんにはその当時首の描き替えもお願いしており、一体1万円。首の描き替えは毎年行うもので、首が足りない時は男の小さめの首を女に替えてもらったりしました。指導料10万円と首4~5体の描き替え代を合わせて、15万円くらいを支払っていたと思います。

戦後最初の頃は、人形の首は治兵衛さんに頼んでいて、歌舞伎役者の松本幸四郎と尾上松緑の顔に似せて作ってもらいました。3つくらい作っていたとき、桐の木を削ったしっかりしたものでした。

四良さんに指導をお願いする以前は、山車を作る時に構想の絵は描かず頭に練って作っていましたが、四良さんが来てからは絵を描いて作るようになりました。四良さんの絵は、黒い紙に色彩絵具で日本画のように美しく描いたものでした。四良さんには昭和55(1980)年の「源為朝」(P34)あたりまで頼んでいたと思います。指導をいただいていた期間が一番脂が乗っていました。日蓮、一葉観音、千早城、安宅の関、本能寺、一の谷と毎年のように入賞しました。新荒町と言えば武者ものと言われるようになったのは、こういう時代があったからです。

思い出に残る山車

当時の山車で一番気に入っているものは、秀作を取った昭和46(1971)年の「日蓮上人佐渡配流」(P27)。これらの衣装はほとんど自分で作りました。山車に書いてある「南無妙法蓮華経」の文字は南宗寺の和尚さんに頼み、その文字を黒い布や金色の紙で型取りして、山車に貼り付けました。また四良さんからのアドバイスで、普通はペニヤ板一枚なのを二枚にして厚くした箱波も、他の

山車組に先駆けて新荒町が作りました。

当時の波しぶきは、竹棒の先端に綿を詰めたぼんぼりを付けたもので、1尺、3尺、6尺、9尺、12尺と長さが5種類あり、合計1,000本くらい作っていました。上位の賞を狙うような組は1,500本くらいも付けていましたね。

岩山車では、当時は軽米あたりに行って藤つるをもらい、構造を組みました。新しいものも数日で曲がり、乾燥すると強度が落ちました。

昭和48(1973)年の「千早城の戦い」(写真3・P28)では人形が足りないので、塙の中から足だけを出した人形を初めて作りました。それでも一体人形が増える。その後も、八艘飛びや本能寺の変の見返りでも足だけの人形を作りました。

新荒町は、意外に鬼を使った山車が少ない組でした。竹を組んで作るのが難しかったんです。鬼などは朝日町が上手でしたが、あまり付き合いが無く、付き合いがあったのは下大工町、七つ家(廿六日町)、百石の組合でした。ですから、昭和53(1978)年「頼光の鬼退治」(P33)の鬼は、四良さんが借りてきたものです。新荒町が上手だったのは建物で、製作に関わる大工さんが三重塔やお寺の屋根等の造作が得意だったんです。勉強のため、大工さんを連れて建物を見に行ったこともあるほどでした。

製作費や収入と、山車の貸し出し

当時山車組の収入の相場は500万円くらいで、経費は450万円くらい、そのうち300万円くらいが製作費の相場でした。私が会計をしていた時期の新荒町の収入は450万円前後で、毎年50万円くらいを残していました。収入の内訳は、6町内からの寄付が150万円、山車の貸し出しが130万円、門付けが130~140万円、補助金は一番多い時で40万円、合計450~460万円でした。当時大工さんには朝から晩まで来てもらい、工賃を払っていました。

山車の貸し出しは、順番に三沢、七戸、十和田、久慈、葛巻、花巻の6ヶ所。それぞれ20万円前後で、花巻だけは遠いので30万円にしていました。お祭りが始まる3日くらい前に、新聞紙やハロン紙やペンキを持たせ、最低3人くらいを手直しに出していました。

お祭りが終われば山車に乗せている馬などを外して、南部食糧さん(現株式会社ライケット)の倉庫の天井から吊るして預ってもらいました。工藤さんが卸団地の倉庫に事務所を構えていた時に

は中二階を作り、そこに置いていました。また、保管はカビに強いお茶箱を使い、衣装類は洗濯とアイロンがけをして、首、手足、鎧、それぞれを分けて保管していました。

製作から身を引いて以降

昭和59(1984)年に委員長が中山安弘さんに代わった時に、工藤勝朗さんと一緒に製作から手を引きました。その際に、人形の手足や首、通帳、写真、資料等、全てを渡しました。中山さんが委員長になってからは、再び歌舞伎調の山車が増えました。

平成4(1992)年には委員長が滝沢求さんになりました。その年の題材は「五人藤娘」(P42)で、正味20日で製作した印象深い山車です。というのも、委員長をしていた中山安弘さんに、その年の春に不幸事があり、辞任届けが出されたのが6月30日だったのです。日にちが無くて本当はやれる状態ではありませんでしたが、「五人藤娘」に題材を決め、村井造花店で藤の造花を買い、滝沢章次さんの奥さんが踊りをしているので、踊りをする人形の振り付けや笠の図柄の指導を仰いで、どうにか20日で山車が間に合いました。

地域の祭りをもう一度

自分のお祭り人生を振り返ってきましたが、今一番気掛かりなのは子供の減少です。私が製作や運営に深く関わっていた昭和30~50年代は、子供が130人くらいはかだっていました。大人も加えると170人くらいにもなるので、山車を引く綱は50mくらいはありました。現在は20mあるでしょうか。子供の減少と関連して、後継者育成にも危機感を感じています。当時はお祭りの時期がお盆の後だったので、夏休みを利用して小中学生がよく山車作りに手伝いに来てくれたものです。そこで紙貼りをしたり、波しぶきを作る作業を手伝ったりと、子供達でも出来ることもあり、そのなかで自然に山車作りを覚えていきました。

現在は、お祭りは夏休みが始まってすぐですし、町内に住む子供の減少や山車小屋の郊外移転と重なって、子供達が山車小屋に集まるのが無くなりました。とても残念なことです。とは言え、100年もお祭りが続いていたのは誇るべきこと。この記念の節目をきっかけに、もう一度地域のお祭りを見直して、これからについてみながら考え、歴史を積み重ねていって欲しいと期待しています。

1:昭和30(1955)年「手鞠獅子」。/2:戦後山車組が復活して、山車製作の中心となる大橋十久満治さん(左)。山車は、昭和26(1951)年「紅葉狩」。/3:昭和48(1973)年「千早城の戦い」。/4:昭和28(1953)年「巴御前」。この馬は、当時サラブレッドと言われていた。(写真1、2、4:大橋邦一、3:高砂イシ)



1



2



3



4

川中島の合戦



昭和52年
— 1977

一の谷の合戦



秀作

昭和54年
— 1979

頼光の鬼退治



昭和53年
— 1978

源為朝



昭和55年
— 1980

花咲爺さん

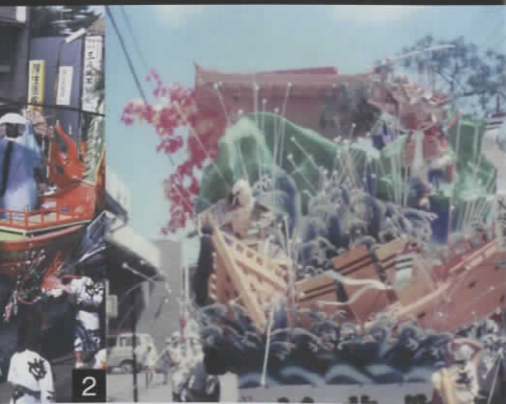
昭和56年
— 1981



見返し七選

1：昭和48（1973）年「千早城の戦い」見返し「桜井の駅 父子の別れ」。／2：昭和49（1974）年「浦島太郎 竜宮に遊ぶ」見返し「浦島太郎と竜宮城」。／3：昭和50（1975）年「安宅の関」見返し「義経八艘飛び」。／4：昭和51（1976）年「本能寺の変」は、山車全体でひとつの場面。上体の無い足だけ

の人形もある。／5：昭和52（1977）年「川中島の合戦」見返し「上杉謙信 塩を武田軍に贈る」。／6：昭和53（1978）年「頼光の鬼退治」見返し「大江山の酒呑童子」。／7：昭和56（1981）年「花咲爺さん」見返し「意地悪爺さん」。(写真1 7：大久保孝造、2：高砂イシ、3、4、5、6：下斗米功行)



1：昭和51（1976）年「本能寺の変」。旧荒町消防屯所からお通りを見る。／2：昭和52（1977）年「川中島の合戦」。／3：昭和54（1979）年、音頭上げをする大久保孝一郎さん。山車は「一の谷の合戦」。／4：新荒町附祭若者連とともに支え続けた長谷川内科胃腸開科医院の長谷川正夫先生（左）と滝沢章次さん（右）。昭和54（1979）年「一の谷の合戦」。／5：旧荒町屯所の前を通る「頼光の鬼退治」の山車。昭和53（1978）年。／6：昭和55（1980）年「源為朝」。／7：昭和57（1982）年、「源義経 八艘飛びの場」。(写真2、3：大久保孝造、4：藤井貞治、5：下斗米功行、6、7：高砂イシ)

左：昭和56（1981）年に発行された八戸市の観光パンフレット。お祭り紹介のページには、新荒町附祭若者連の山車が掲載された。(発行：八戸市 / 制作：赤間印刷工業株式会社)



源義経 八艘飛びの場

努力賞

昭和57年
— 1982



写真：株式会社フォトセンター惣門

参加70年 山車参加50回
南部藩に纏る七福神と十二支

昭和59年
— 1984



写真：株式会社フォトセンター惣門

楠公奪戦の場

昭和58年
— 1983



写真：株式会社フォトセンター惣門

新 牛若丸

昭和60年
— 1985



写真：株式会社フォトセンター惣門

大石内蔵之助
豪遊の場



昭和61年
— 1986

写真：株式会社フォトセンター惣門

新
亡霊知盛



昭和63年
— 1988

本能寺の変



昭和62年
— 1987

写真：株式会社フォトセンター惣門

義経八艘飛び



奨励賞

平成元年
— 1989

写真：株式会社フォトセンター惣門

舟弁慶



平成2年
— 1990

五人藤娘



平成4年
— 1992

赤穂浪士



平成3年
— 1991

水芸
滝の白糸



奨励賞

平成5年
— 1993

写真：株式会社フォトセンター惣門

参加80年 山車参加60回
新 娘道成寺
 安珍と清姫



平成6年
 —1994

花見奴
 春の宴



平成7年
 —1995



1：平成3（1991）年「赤穂浪士」。この年に新調した台車は短命で、7年しか持たなかった。／2：滝沢章次さん。昭和28（1953）年から昭和36（1961）年まで委員長を務めた。／3：佐々木詳浩さん（中央）。平成10（1998）年から平成13（2001）年まで委員長を務めた。／4：平成5（1993）年「水芸 滝の白糸」。女人形の手元から、本物の水が

出て観客を驚かせた。この仕掛けは、ワイパーのウインドウウォッシュの装置を使って実現させた。／5 7：平成4（1992）年「五人藤娘」。／6：平成5（1993）年「水芸 滝の白糸」。山車小屋（上徒士町）で奨励賞入賞を祝う。／8：平成6（1994）年「新 娘道成寺 安珍と清姫」。写真1 7 8：株式会社フォトセンター惣門、2, 3, 4：藤井貞治



かぐや姫



平成8年
— 1996

写真：株式会社グランフォート

奇襲

義経

鶴越の逆落とし

奨励賞

平成10年
— 1998



写真：株式会社グランフォート

義経八艘飛び



平成9年
— 1997

写真 株式会社グランフォート

船弁慶



平成11年
— 1999

写真：株式会社グランフォート

十和田山由来記 龍神伝説
南蔵坊と八之太郎の戦い

平成12年
— 2000



写真：株式会社グランフォート

九戸の乱
九戸実親奮戦の場

平成14年
— 2002



写真 株式会社グランフォート

勇将南部信光
甲州波木井の戦い
奮戦若武者西沢平馬

平成13年
— 2001



写真：株式会社グランフォート

南部六郎政長
根城攻防戦

平成15年
— 2003



写真：株式会社グランフォート

向鶴伝説
南部光経

参加90年 山車参加70回

秋田出陣

平成16年
— 2004



写真：株式会社グランフォート

九郎義経

一の谷へ攻め入る

平成17年
— 2005



写真：株式会社グランフォート



1：平成7（1995）年「花見奴 春の宴」。山車手前の2体の人形が持つ繩は、洗濯機のモーターを付けて回転させた。／2：平成8（1996）年「かぐや姫」。／3：平成10（1998）年の製作メンバー。／4：平成13（2001）年の製作メンバー。／5：平成9（1997）年「義経八艘飛び」。主役の源義経は、せり上がった後、からくりで左右に動いた。／6：平成10（1998）年「奇襲 義経 鶴越の逆落とし」。この年に台車を新調した。／7 8：平成13（2001）年、山車を大きく作り替えた。／9：平成16（2004）年見返し。／10：平成11（1999）年「船弁慶」。／11：平成17（2005）年見返し。／12：当山車組最高顧問滝沢求さん（右から2人目）。平成4（1992）年から平成9（1997）年まで委員長を務める。三村申吾知事（左から2人目）と。平成23（2011）年。／13：平成20（2008）年「細川ガラシャ」。(写真12：株式会社フォトセンター惣門、12：藤井大輔)

大阪夏の陣
「光り武者南部信景」

平成18年
— 2006



写真：株式会社グランフォート

「儚き乱世の華」
細川ガラシヤ

平成20年
— 2008



写真：株式会社グランフォート

川中島の戦い

平成19年
— 2007



写真：株式会社グランフォート

児雷也

平成21年
— 2009



写真：株式会社グランフォート

北松齋
花巻城攻防戦

平成22年
— 2010



写真：株式会社グランフォート

戦場の綺羅星「甲斐姫」
忍城攻防戦

平成24年
— 2012



写真：株式会社グランフォート

南部師行
騎馬軍団出陣の場

平成23年
— 2011



写真：株式会社グランフォート

本能寺の変

平成25年
— 2013



写真：株式会社グランフォート

新荒町附祭若者連 100年のあゆみ



年	題名	賞	主な出来事
明治 10 (1877) 年			新荒町に消防組「若組」が設立される。(2月)
” 19 (1886) 年			神明宮が加わり、現在の三社大祭のかたち近づいた。
” 20 (1887) 年頃			風流山車が初めて運行される。
大正 4 (1915) 年	花川戸助六道行の場		新荒町附祭若者連初参加。
” 9 (1920) 年			旧荒町消防屯所が完成する。(10月6日)
” 10 (1921) 年	花川戸助六道行の場		
” 11 (1922) 年	夜討曾我の内 御所の五郎丸と曾我五郎丸		
” 12 (1923) 年			
” 13 (1924) 年			八戸大火により中心部の 1393 戸が焼失する。
” 14 (1925) 年	矢ノ根五郎		
” 15 (1926) 年	忠臣蔵 (松の廊下)		
昭和 2 (1927) 年	大久保彦左エ門 (木村の梅)		
” 3 (1928) 年	千葉周作		
” 4 (1928) 年	水戸黄門		八戸町 小中野町 湊町 鮫村が合併して八戸市となる。(5月1日)
” 5 (1930) 年	仇討快撃録 宮本武蔵		
” 6 (1931) 年	宮本武蔵と塚原卜傳との鍋蓋試合		山車参加 10 回
” 7 (1932) 年	仙臺萩		
” 8 (1933) 年	忠臣蔵 兜攻め		三陸大津波により八戸沿岸も大打撃を受ける。
” 9 (1934) 年	奥州安達ヶ原		
” 10 (1935) 年	戻橋		
” 11 (1936) 年	大森彦七		
” 15 (1940) 年			厳しさを増す社会情勢のなかで、1886 (明治 19) 年以來続けられてきた三社大祭が休止。
” 16 (1941) 年			太平洋戦争突入。(12月8日)
” 21 (1946) 年			戦後初の三社大祭が9月1日から三日間盛大に執行。
” 25 (1950) 年	大原女の奴		7町内(新荒町、荒町、上徒士町、常番町、町組町、稲荷町、上組町)で山車組が復活。
” 26 (1951) 年	紅葉狩		
” 27 (1952) 年	矢の根の五郎	秀作	
” 28 (1953) 年	巴御前	秀作	
” 29 (1954) 年	三人石橋	3位	参加 40 年 山車参加 20 回
” 30 (1955) 年	手鞠獅子		6町内(新荒町、荒町、上徒士町、常番町、町組町、稲荷町)での山車組になる。この年の山車審査は無し。
” 31 (1956) 年	鳴神	秀作	
” 32 (1957) 年	賤ヶ嶽七本槍		
” 33 (1958) 年	村上四郎義光 錦旗奪還の場		八戸警察署より電線切断事故防止のため山車の高さ標準 4メートル前後を厳守の要請が出される。
” 34 (1959) 年	川中島合戦の場	秀作	
” 35 (1960) 年	黒田武士	努力賞	この年から8月20日(前夜祭)、21日(ミコシ渡御)、22日(中日)、23日(ミコシ還御)の日程で行われる。チリ地震津波襲来。(5月24日)
” 36 (1961) 年	伊達候と高尾太夫		白銀大火、1043棟焼失。
” 37 (1962) 年	孫悟空	努力賞	
” 38 (1963) 年	お江戸日本橋	努力賞	
” 39 (1964) 年	義平 重盛紫雲殿奮戦の場		参加 50 年 山車参加 30 回 三社が管理していたまつり行事の一切の運営を三社大祭運営委員会が担当することとなる。
” 40 (1965) 年	恵比寿鯛		
” 41 (1966) 年	那須の与一		
” 42 (1967) 年	娘道成寺		「三社大祭」の名称が「はちのへ祭」に改称される。

年	題名	賞	主な出来事
昭和 43 (1968) 年	壺坂靈験記		十勝沖地震発生。(5月16日)
” 44 (1969) 年	依藤太の百足退治	努力賞	
” 45 (1970) 年	天馬		「山車ものがたり」(はちのへ出版発行) 創刊。
” 46 (1971) 年	日蓮上人佐渡配流	秀作	舞台が回転する類家山車組「赤穂浪士討入り」きっかけに、現在のような大掛かりなからくりが付いていく。
” 47 (1972) 年	一葉観音と道元禪師	努力賞	
” 48 (1973) 年	千早城の戦い	努力賞	
” 49 (1974) 年	浦島太郎 竜宮に遊ぶ		参加 60 年 山車参加 40 回
” 50 (1975) 年	安宅の関	努力賞	「はちのへ祭」の名称が10年ぶりで「八戸三社大祭」に戻される。
” 51 (1976) 年	本能寺の変	奨励賞	
” 52 (1977) 年	川中島の合戦		
” 53 (1978) 年	頼光の鬼退治		
” 54 (1979) 年	一の谷の合戦	秀作	
” 55 (1980) 年	源為朝		
” 56 (1981) 年	花咲爺さん		
” 57 (1982) 年	源義経 八艘飛びの場	努力賞	祭りの開催日が8月1日から三日間に変更になり、中日に夜間運行が行われる。旧荒町消防屯所が取り壊される。
” 58 (1983) 年	楠公奪旗の場		現新荒町消防屯所が完成する。(2月14日)
” 59 (1984) 年	南部藩に纏る七福神と十二支		参加 70 年 山車参加 50 回
” 60 (1985) 年	新 牛若丸		
” 61 (1986) 年	大石内蔵之助 豪遊の場		
” 62 (1987) 年	本能寺の変		
” 63 (1988) 年	新 亡霊知盛		
平成元 (1989) 年	義経八艘飛び	奨励賞	
” 2 (1990) 年	舟弁慶		
” 3 (1991) 年	赤穂浪士		
” 4 (1992) 年	五人藤娘		
” 5 (1993) 年	水芸 滝の白糸	奨励賞	
” 6 (1994) 年	新 娘道成寺 安珍と清姫		参加 80 年 山車参加 60 回 三陸はるか沖地震。(12月28日)
” 7 (1995) 年	花見奴 春の宴		市庁舎立て替えにより前夜祭会場が中心街に変更。
” 8 (1996) 年	かくや姫		
” 9 (1997) 年	義経八艘飛び		
” 10 (1998) 年	奇襲 義経 鴨越の逆落とし	奨励賞	
” 11 (1999) 年	船弁慶		
” 12 (2000) 年	十和田山由來記 龍神伝説 南蔵坊と八之太郎の戦い		
” 13 (2001) 年	勇将南部信光 甲州波木井の戦い ~奮戦若武者西沢平馬~		
” 14 (2002) 年	九戸の乱~九戸実親奮戦の場~		東北新幹線八戸駅開業。(12月1日)
” 15 (2003) 年	南部六郎政長 根城攻防戦		日程に後夜祭が加えられる。
” 16 (2004) 年	向鶴伝説 南部光経 秋田出陣		参加 90 年 山車参加 70 回 「八戸三社大祭の山車行事」が重要無形民俗文化財に指定。(2月6日)
” 17 (2005) 年	九郎義経 一の谷へ攻め入る		
” 18 (2006) 年	大阪夏の陣「光り武者南部信景」		
” 19 (2007) 年	川中島の戦い		多目的交流広場「長者まつりめぐ広場」完成。
” 20 (2008) 年	~儂き乱世の華~細川ガラシャ		
” 21 (2009) 年	児雷也		「山車ものがたり」(はちのへ出版発行) 終刊。
” 22 (2010) 年	北松齋 花巻城攻防戦		東北新幹線全線開業。(12月4日)
” 23 (2011) 年	南部師行 騎馬軍団出陣の場		東日本震災(3月11日)の影響で、この年の山車審査は中止。
” 24 (2012) 年	戦場の綺羅星「甲斐姫」~忍城攻防戦~		
” 25 (2013) 年	本能寺の変		
” 26 (2014) 年	鈴鹿御前		参加 100 年 山車参加 80 回



1：昭和 35 (1960) 年「黒田武士」。当時主流の高欄山車には、山車の横に付けていた花が風情を出していた。／2：昭和 39 (1964) 年「義平 重盛紫雲殿奮戦の場」。／3：昭和 43 (1968) 年、新荒町の尻多商店前を通る、新荒町の山車行列／4：昭和 53 (1978) 年、お還りで横断幕を掲げる。／5：昭和 56 (1981) 年「花咲爺さん」。前夜祭にて。(写真 2, 4, 5：高砂イシ、3：下斗米功行)

新荒町附祭若者連
八戸三社大祭 参加百周年記念祝賀会
出席者一覧

日時:平成26(2014)年11月2日(日)午後3時
会場:八戸パークホテル

八戸市長
神明宮 宮司 中居 靖夫
参議院議員 滝沢 求
市議会議員 森園 秀一
滝沢 貴子
工藤 勝朗
佐々木 詳浩
佐々木 博子
(株)サンボディー
(株)カーライフ 45
八戸陸送(株)
ピーシートランス(株)
ビューティーサロン銀座 杉澤 妙子
東野建設(株)
第一清掃(株)
社会福祉法人 合歓の会 凶南保育園
鴨沢塗料(株)
東北車輛サービス(株)
(有)ぱっちゃん
(有)富士文房具店
味楽房てんじく 中島 京子
青い森信用金庫 廿三日町支店
(株)友和ホンダ販売
新光印刷(株)
税理士法人北星会計事務所
高坂 登
瀧澤 康雄
理容育毛サロン ササキ 佐々木 孝司
(有)山一商事
(株)グランフォート
(株)ダイカツ
田村 博睦
根元 良夫
中居食品容器(株)
(株)フォトセンター惣門
藤田 康雄
嶋守鍼灸院 嶋守 直人
中山 時枝
小笠原 修
眞角 良一
木村 明生

中里 明光
杉澤 敦夫
秋山 豊
鈴木 英明
秋田 清
高橋 昌弘
佐々木 伸夫
宮澤 文夫
沼田 昌敏
山田 雅彦
廿六日町山車組
上組町若者連
根城新組山車組
賣市附祭山車組
吉田産業グループ山車組
白山台山車組
十一日町籠組
塩町附祭組
下大工町附祭
下組町山車組
内丸親睦会
柏崎新町附祭
城下附祭
新井田附祭振興会
青山会山車組
朔日町附祭
吹上山車組
八戸共進会山車組
糠塚附祭組
長横町粋組
六日町附祭若者連
類家山車組
十六日町山車組
鍛冶町附祭若者連
大久保 孝造
黒沢 昭一郎
小笠原 嘉
檜館 裕康
豊巻 忠雄
嶋 勝彦
後村 国八

藤井 貞治
関川 たみ
村井造花店
(株)ブンメー
八戸部品工業(株)
美容室 Tee 館 たい子
八戸工業大学第一高等学校
鳶木戸場 明
工藤 昌男
新井山 雅彦
下斗米 功行
中村 真也
泉山 修一
藤井 大輔
櫻井 幸男
岩崎 清孝
三浦 卓夫
倉本 崇
倉本 美奈子
根城 亜希子
嶋守 治子
道池 貴子
岩館 雅樹
佐藤 淳一
佐藤 政子
今野 友生
類家 慎二
葛西 晋
熊谷 貴之
熊谷 千代
橋本 将昂
高坂 真
泉山 龍哉
倉本 愛果
倉本 聖蓮
倉本 鼓愛
嶋守 夏音
熊谷 貴一
熊谷 うた



1:昭和27(1952)年「矢の根の五郎」。たくさんの子供達が参加していた。/2:昭和54(1979)年、秀作に輝いた「一の谷の合戦」。お選りで鍛冶町から坂道を上がる。/3:昭和43(1968)年「壺坂霊験記」。同年5月に発生した、十勝沖地震からの復興を祈願した札が立てられた。/4:昭和41(1966)年「那須の与一」。以前は笛吹が少なく、山車の台上で1~2人が吹くのを基本としていた。/5:大太鼓を叩くのは、昭和59(1984)年から平成3(1991)年まで委員長を務めた中山安弘さん。昭和59(1984)年「南部藩に纏る七福神と十二支」。前夜祭にて。(写真1:大橋邦一、2,4,5:高砂イシ、3:松井写真館)

今後とも、新荒町附祭若者連への
変わらぬご支援、ご協力を、何卒宜しくお願い申し上げます。
新荒町附祭若者連一同

100周年記念事業 実行委員会

藤井貞治、工藤昌男、森園秀一、新井山雅彦、下斗米功行、藤井大輔、高坂真

写真、資料提供及び協力者一覧

赤間印刷工業株式会社、大久保孝造、大橋邦一、有限会社カメラの和弘、株式会社グランフォート、新荒町八幡宮
神明宮、嶋村久子、鈴木育子、高砂イシ、高砂勝臣、デーリー東北新聞社、東奥日報社、新井山雅彦、八戸市
八戸市消防団第一分団一班、馬場司、株式会社フォトセンター惣門、藤井貞治、松井写真館 (敬称略、五十音順)

参考資料 文献

『八戸三社大祭文化財報告書』(八戸市教育委員会)
『八戸三社大祭公式ガイドブック 2010』(八戸観光コンベンション協会)
・『八戸市消防団史』(八戸市)
『なつかしの八戸三社大祭』(八戸三社大祭山車祭り行事保存会)
『南部寺子屋「はちのへ塾」 八戸ふるさと検定「八戸写真帖」明治 大正・昭和・平成』(八戸観光コンベンション協会)

編集に際し、関係諸団体・個人など多くの方にご協力をいただきました。厚く御礼申し上げます。

制作:新荒町附祭若者連
デザイン:高坂真(八戸ノ本室)
編集:下斗米功行、高坂真(八戸ノ本室)

発行:新荒町附祭若者連 委員長 工藤昌男
八戸市新荒町36 Tel.0178-43-0732
印刷:新光印刷株式会社

2014年11月2日発行
Printed in Japan

※本誌掲載の写真・図版・記事等の無断転載 複写を禁じます。

若

